

【目次】

序論

第一章 存覚教学に関する先行研究と課題

第一節 存覚教学全般の先行研究にみる課題

第一項 通説的研究とその問題点

第二項 本願寺との関係を論じる研究とその問題点

第二節 存覚の念仏論研究にみる課題

第一項 通説的研究とその問題点

第二項 念仏論の全体像を論じる研究

第三項 近年の研究成果

第三節 存覚の報恩論研究にみる課題

第一項 伝統的研究とその問題点

第二項 本願寺との関係を論じる研究とその問題点

第三項 近年の研究成果

第四節 存覚の善知識論研究にみる課題

第一項 本願寺との関係を論じる研究とその問題点

第二項 初期真宗教団との関係を論じる研究とその問題点

小結

第二章 初期真宗教団の教学の研究 一覚如教学・存覚教学の形成過程を探る前提として一

第一節 初期真宗教団全体の教学理解

第一項 初期真宗教団の宗派意識

第二項 初期真宗教団の教学的傾向

第三項 初期真宗教団の史料

第二節 荒木門徒系の教学

第一項 荒木門徒系の特色と著作

第二項 荒木門徒系の念仏論

第三項 荒木門徒系の報恩論

第四項 荒木門徒系の善知識論

第三節 鹿島門徒の教学

第一項 鹿島門徒の特色と著作

第二項 鹿島門徒の念仏論

第三項 鹿島門徒の善知識論

第四節 高田門徒の教学

第一項 高田門徒の特色と著作

第二項 高田門徒の念仏論

- 第三項 高田門徒の報恩論
- 第四項 高田門徒の善知識論

小結

### 第三章 覚如教学の再検討 ―初期真宗教団の教学との関連を中心に―

#### 第一節 覚如の人間関係と著作の時代区分

- 第一項 第一期の人間関係と著作
- 第二項 第二期の人間関係と著作

#### 第二節 覚如の念仏論の再検討

- 第一項 初期真宗教団の念仏論との共通点
- 第二項 初期真宗教団の念仏論との相違点

#### 第三節 覚如の報恩論の再検討

- 第一項 初期真宗教団の報恩論との共通点
- 第二項 初期真宗教団の報恩論との相違点

#### 第四節 覚如の善知識論の再検討

- 第一項 初期真宗教団の善知識論との共通点
- 第二項 初期真宗教団の善知識論との相違点

小結

### 第四章 存覚教学の研究 ―初期真宗教団および覚如の教学との関連を中心に―

#### 第一節 存覚の人間関係と著作の時代区分

- 第一項 第一期の人間関係と著作
- 第二項 第二期の人間関係と著作
- 第三項 第三期の人間関係と著作

#### 第二節 存覚の念仏論

- 第一項 初期真宗教団および覚如の第一期の念仏論との共通点
- 第二項 覚如の第二期の念仏論との共通点
- 第三項 存覚における行信関係の構造

#### 第三節 存覚の報恩論

- 第一項 初期真宗教団および覚如の報恩論との共通点
- 第二項 初期真宗教団および覚如の報恩論との相違点
- 第三項 存覚の報恩論の全体像

#### 第四節 存覚の善知識論

- 第一項 初期真宗教団および覚如の善知識論との共通点
- 第二項 初期真宗教団の善知識論との相違点と存覚の指導
- 第三項 覚如の善知識論との相違点
- 第四項 存覚の善知識論と獲信者の教団

小結

結論

## 【論文の要旨】

### 序論

存覚（一二九〇—一三七三）の教学は、親鸞の開頭した真宗教義を解釈する上で古くから重んじられ、後世の宗学者に多大な影響を与えた。その一方、存覚教学を批判的に解する見解も存在し、存覚の教学には両極端の評価がなされてきた。そのため、存覚教学の教学史上の位置づけは未だ不明確な状況にある。このような状況が生じた要因を探るため、従来の存覚教学研究を概観した結果、筆者は先行研究には以下の三つの問題点があり、これらの問題が解決されていないために存覚教学が正当な評価を得ないまま今日に至っているのではないかと考えた。まず、一点目の問題である。先行研究では存覚教学における浄土宗的理解、聖道門的理解に着目される事が多いが、これらの理解は浄土異流や聖道門における修学などを経て存覚が創意したとされ、その他の成立背景については余り検討されていない。特に、存覚と深く交流し、教学にも影響を与えたと考えられる初期真宗教団は、善導・法然の専修念仏の教えを基盤とし、聖道門の思想にも留意していたが、彼等の教学と存覚教学の関係性は明らかにされていない。次に、二点目の問題である。通説では存覚教学は存覚の父・覚如の教学と対照的とされ、覚如が親鸞教義の顕彰に努めたのに対し、存覚は浄土異流や聖道門に対する対外論を重視したとされてきた。この点について、その要因を覚如と存覚の確執にあるとする見解もあるが、存覚の前半生では覚如との関係は良好であり、両者の教学の内、念仏論、報恩論、善知識論には複数の共通点が窺える。ゆえに、存覚教学の形成過程における覚如教学の影響の有無も検討する必要がある。さらに、三点目の問題は、従来の存覚に関する真宗学の分野の研究が真宗史学の研究成果を十分に取り入れていないという点にある。特に、存覚と初期真宗教団の関係については、真宗史学の研究において多くの蓄積があるにも関わらず、その成果を真宗学の分野と適切に関連付けられていない。

本論文では、以上の問題点を解決し存覚教学の意義を再検討するため、以下のような流れで論じる。まず、第一章では先に述べた三点の問題を中心に、従来の存覚教学研究の問題点について詳述する。次に、第二章では存覚教学の形成に影響を与えた初期真宗教団の教学の特徴を明らかにする。また、第三章では、第二章で考察した初期真宗教団の教学と覚如教学の関係に着目し、従来の覚如教学の位置づけについて再検討する。そして、第四章では、初期真宗教団・覚如との教学的関係および人間関係に留意しながら、存覚教学の特色を考察する。本論文は、以上のような構成により、存覚教学における念仏論、報恩論、善知識論を初期真宗教学史の中で把握すると共に、従来不鮮明であった存覚教学独自の意義を見直す事を目的とする。

### 第一章 存覚教学に関する先行研究と課題

本章では、従来の存覚教学研究を概観し、その問題点や参照となる点を指摘しつつ本論文で考察する論点を整理した。

まず、従来の存覚教学全般に関する研究では、存覚教学と初期真宗教団や覚如の教学との共通性には留意されていないが、存覚教学の形成過程を論じる上でこの点に対する検討を行う事が不可欠である事を指摘した。さらに、存覚教学には本願寺教団の運営の意図があるとする見解があるが、これは存覚著作の執筆依頼者や当時の時代背景を考慮すると成立しない事を論じた。

また、念仏論研究の問題としては、従来存覚の念仏論の中心的思想とされる念仏往生・称名正定業の

重視の傾向が、如何なる過程を経て形成されたかを検討する必要がある。また、存覚の行信理解については、行信不離や行信不二を説いていると指摘されているが、行信関係の構造や名号理解との関係性など未だ不明確な点も存する。さらに、近年指摘されている覚如の念仏論との共通点にも留意しつつ、称名報恩や名号正定業に関する言及も含めて、存覚の念仏論の幅広い側面を考察せねばならない。

次に、報恩論研究の問題であるが、先行研究では父母や国王といった世俗的事項に関わる報恩思想に焦点が当てられている。これに対し、仏道上の報恩思想については詳細に論じられていない上、根拠とされている存覚の著作も限定的であるので、存覚の報恩に関する言及を網羅的に把握し、その全体像を考察する必要がある。さらに、従来伝道的意義があるとされる父母に対する報恩思想については、存覚が指導した荒木門徒系の明光派教団に対する指導としての側面も考察する余地がある。

最後に、善知識論研究の問題である。従来存覚の善知識論は初期真宗教団の善知識帰命説と類似する面があると指摘されているが、この見解は存覚の一部の言及のみを根拠としているため、存覚の善知識に対する言及を広く検討して論じるべきである。また、近年では、初期真宗教団と存覚の善知識論の関係について論じた研究がみられるが、その成果を参照し更に詳細な文献の検討を行う必要がある。その際には、関東の原始的な初期真宗教団から存覚が受けた影響と、西日本の初期真宗教団に対し存覚が如何なる指導を行ったのかを区別しながら考察する。

## 第二章 初期真宗教団の教学の研究 ―覚如教学・存覚教学の形成過程を探る前提として―

初期真宗教団の教学は真宗教学の嚆矢と位置づけられるが、従来この分野に関する研究は多くなされていない。そこで、本章では、覚如・存覚の教学を論じる前提として、彼等に影響を与えたと思われる初期真宗教団の教学的特色について考察した。具体的には、阿佐布門徒の了海、甘繩門徒の誓海、仏光寺了源など存覚と深く交流した荒木門徒系の著作・掟書を中心として、鹿島門徒の信海の著作、高田門徒の真仏、顕智の要文集について検討した。

まず、初期真宗教団全体に自己の法系を法然の専修念仏の流れを汲むものと理解する宗派意識があり、聖徳太子信仰や光明本尊の依用、善知識の尊重などの共通の教学的傾向がある事を指摘した。続いて、各門徒独自の信仰形態や特色を論じた上で、念仏論、報恩論、善知識論の傾向を考察した。

はじめに、念仏論であるが、初期真宗教団では全体的に善導・法然の教えを基盤とした念仏往生説が重視されている。また、行信関係については、念仏往生を信じるという表現や名号を信じて称するとの表現がみられ、行信不離を示す意図が窺える。そして、称名報恩については高田門徒の要文集に親鸞著作の引文がみられる程度で、初期真宗教団では重視されていない。さらに、天台宗や真言宗等の他宗の念仏思想にも留意する一方で、聖道門に対して念仏門の凡夫相應の教法としての意義を主張する側面もみられ、念仏論を通して聖道門との対峙を意識する姿勢が窺える。

次に、報恩論であるが、初期真宗教団では全体的に談義唱導などの伝道活動が盛んで、その際に太子や父母、神祇の恩などについて説いている。また、当時の世俗社会では追善の仏事や報恩のための造立供養が一般的に行われていたが、初期真宗教団にも同様の傾向がみられる。これに対し、仏恩や称名報恩などの説示はほとんどみられない。ゆえに、初期真宗教団では報恩の教義的意義を示すよりも、伝道などの現実的側面に即して報恩を説く傾向がある。

最後に、善知識論であるが、初期真宗教団全体で善知識の直説や行者の獲信における善知識の教導が重んじられている。さらに、浄土門の師資相承や各教団の師資相承も重視された。そして、師資相承の際には教団指導者の著作の相伝や面授が行われた。また、荒木門徒系や鹿島門徒では善知識帰命の傾向

が濃厚で、経釈の文に独自の解釈を施して善知識帰命の論理を構築している。また、荒木門徒系では師弟間の紛争に関する規定も具体的に定められている。この点について、従来は教団指導者である善知識の組織統制としての意味があると指摘されてきた。この点に加えて、未だ確立した真宗教学が存しなかった初期真宗の時代では、何が正統な教えであるかを確認するために善知識の教えが重視されたと考えられ、このような教学的問題との関係から善知識帰命の傾向が生じた可能性がある事を指摘した。また、荒木門徒系と鹿島門徒の善知識論には共通点が多くみられる事などから、各教団は独自の相承を重んじながらも、時に同じ親鸞門流の教団の教学を参照し相互に影響を受けつつ教学を確立したと考えられる。

### 第三章 覚如教学の再検討 ―初期真宗教団の教学との関連を中心に―

本章では、初期真宗教団の教学との共通点、相違点に留意しながら、覚如教学の特色について再検討した。まず、覚如の各著作の成立背景や教学的傾向を考慮した上で、覚如著作を初期真宗教団と比較的良好な関係を有していた第一期（前期）と、初期真宗教団との不和が顕著となり覚如独自の教学的傾向が示される第二期（後期）に分類し、覚如の念仏論、報恩論、善知識論の傾向について論じた。

まず、念仏論であるが、第一期では善導・法然の念仏往生説を重んじ、行信不離や、聖道門を意識して念仏門の意義を説くといった初期真宗教団との共通点が多くみられる。これに対し、第二期に至ると覚如は信因称報や信一念業成を強調し、他の親鸞門流を批判するようになる。このような覚如の念仏論の変遷は、大谷廟堂を巡る初期真宗教団との関係悪化に伴うものと考えられる。

次に、報恩論については、師に対する追善や太子の恩を説く点など、初期真宗教団との共通点が第一期、第二期を通じてみられる。ただし、覚如は称名や伝道が仏恩報謝となるとして報恩を教義的に位置づけているが、この傾向は初期真宗教団にはみられないため、覚如独自の報恩観と言える。

さらに、善知識論では、覚如の第一期著作を中心に初期真宗教団の善知識論との共通点が多くみられる。例えば、善知識の教導や面授、著作の相伝を重んじ、浄土門の師資相承を重視する傾向や、本願成就文の「聞」の解釈を通して獲信における善知識の教導を強調する点などである。これに対し、第二期になると、覚如は三代伝持の血脈を主張し、初期真宗教団の善知識帰命説を批判していく。このような覚如の善知識論の変遷も、念仏論と同様に初期真宗教団との関係の悪化に起因すると思われる。さらに、『改邪鈔』第十八条の善知識に関する言及には、『改邪鈔』に先行して成立した存覚著作の表現と類似する表現がみられ、存覚の善知識論の影響も窺える。

そして、従来は覚如教学の第二期の傾向のみに焦点が当てられていたが、第一期を中心に覚如教学には初期真宗教団の教学との共通点がみられるため、第一期の教学も覚如教学の一側面として留意せねばならない。また、覚如の第一期著作の成立期には、存覚は覚如と同居し法門の指導も受けていたので、覚如の第一期の教学的傾向が存覚教学に与えた影響についても考察を要する。さらに、存覚が覚如に与えた影響の有無にも留意しつつ、覚如と存覚の教学間の相互的関連も明らかにする必要がある。

### 第四章 存覚教学の研究 ―初期真宗教団および覚如の教学との関連を中心に―

本章では、はじめに存覚の人間関係の変化を中心とした時代背景を考慮しながら、第一期、第二期、第三期の各時代の存覚の教学的傾向について確認した。これを踏まえ、存覚の念仏論、報恩論、善知識論について、初期真宗教団の教学および覚如教学との共通点、相違点ごとに整理し検討した。

まず、念仏論であるが、従来から存覚の念仏論の特色とされる念仏往生・称名正定業の重視や、行信

不離、聖道門を意識して念仏門の意義を説く傾向は、初期真宗教団や覚如の念仏論の影響が窺える。さらに、信因称報説や信一念業成説については、その成立自体は存覚が覚如に先行しているが、表現の面では覚如から存覚への影響がみられ、両者の念仏論には相互的関連が存する。

次に、報恩論では、父母の恩、財宝を用いた報恩等の現実に即した報恩を説く点は、初期真宗教団と共通し、称名や伝道の仏恩報謝としての意義を説く点は覚如と共通する。また、当時の伝道では報恩説話が説かれたが、その際には絵伝等の視覚史料が用いられた。この点に関して、明光派教団が存覚の指導により制作した『親鸞絵伝』『法然絵伝』は、覚如が制作した絵伝の絵図から影響を受けていると指摘されている。さらに、太子の恩を説く点などは初期真宗教団と覚如の両者の影響が窺える。これに対し、国王に対する報恩は存覚独自の思想であり、当時の親鸞門流の念仏者を対外的批判から擁護するための理論として構築されている。

さらに、善知識論では、存覚は善知識の直説や教導、指導者の著作の相伝や面授、浄土門の師資相承を重んじるが、これは初期真宗教団と覚如の第一期の善知識論と共通する。しかし、存覚は東国門徒にみられた善知識帰命説を受容する事なく、西日本の仏光寺教団や明光派の善知識帰命の傾向を緩やかに指導するため、著作を著したり視覚史料の改変を行った。また、存覚には三代伝持の血脈説や、善知識帰命説を激しく批判する傾向はみられないが、それ以外の点は覚如の善知識論と大きく齟齬しない。

このように、本章では存覚教学の特色を初期真宗教団や覚如の教学との関係から考察したが、それに加えて従来指摘されていない存覚教学の意義も明らかにした。

まず、念仏論について、存覚は善導・法然のみならず親鸞著作の文を引用し念仏往生や称名正定業の意義を説いている。さらに、存覚の念仏論は称名正定業を中核として付随的に称名報恩を説くものであるが、この構造は親鸞の念仏論と類似している。また、存覚の行信不離と行信不二の思想について、先行研究で留意されていない文の検討を通して再検討し、親鸞の行信理解との共通性がある事を論じた。

次に、報恩論であるが、存覚の報恩思想の全類型を検討すると、存覚は全時期の著作で親鸞の報恩思想を基盤として仏道上の報恩について述べているが、世俗に関わる報恩の言及は伝道材料の提供や他宗との対論といった個別的情况を背景として述べられており、限定された時期にしかみられない。ゆえに、存覚の報恩論の中核は仏道における報恩思想にあると言える。

最後に、善知識論であるが、存覚は善知識という語の意味として、指導者を意味する「教授の善知識」のみならず、「同行の善知識」の意味もあると述べている。この傾向は、全時期の著作にみられるため、存覚の善知識論の基底をなす理解と言える。また、存覚は善知識を「如来にひとし」者、つまり獲信者であると位置づけ、同じ獲信者たる指導者と同行とが共に助け合いながら念仏者集団を形成する事を志向しており、ここに存覚の善知識論の特色がある。

## 結論

本論文では、序論で述べた存覚教学研究の三つの問題点を克服し、従来の存覚教学に対する位置づけについて再考した。その結果得られた成果は大きく二点ある。

一点目は、存覚教学を初期真宗教学史の潮流に位置づけたという成果である。初期真宗教学史は、初期真宗教団の教学から覚如教学、覚如教学から存覚教学という一方向的な流れのみで把握できるものではない。何故ならば、初期真宗教団の教学と存覚教学との間、あるいは覚如教学と存覚教学の間には、相互的関連性が存するからである。つまり、存覚教学は初期真宗教団の教学や覚如教学を継承あるいは展開する形で成立した面があり、初期真宗教団や覚如もまた、存覚の教学に影響を与えたり影響を受け

た部分がある。ゆえに、三者は共に親鸞が説いた真実の教えとは何かを真摯に問い、その姿勢を互いに参照し合いながら教学を構築したと言える。このような初期真宗教団、覚如、存覚の教学は、真宗教学史の原点と位置づけることができ、真宗教学史全体を理解していく上でも重視されるべきである。

次に、二点目の成果は、存覚教学の評価を新たな視点から見直した所にある。具体的な内容は第四章で述べた通りであるが、特に重要なのは、存覚の念仏論、報恩論、善知識論ともに、親鸞思想を基盤とする面があるという点である。さらに、従来の存覚教学の各論の研究では、主に中核的思想のみに着目されていた。これについて、本論文では存覚の人間関係や時代背景を考慮し、それに伴う存覚の思想の時代的変遷に留意しながら、存覚教学の各論における中心的思想のみならず付随的思想にも検討を加え、各論の全体像を明らかにする事できた。

以上のように、存覚の教学と初期真宗教団や覚如の教学との相互的関連性を明らかにする事で存覚教学を初期真宗教学史の流れに位置づけ、さらに従来指摘されていない存覚教学の意義を明らかにした所に本論文の意義がある。